

看護学生の気分の変化が学習意欲に与える要因

國岡照子¹⁾ 丹下純子²⁾

要 旨

本研究は、看護学生の気分が学習意欲にどのような影響を及ぼしているか、その要因は何かを明らかにする事を目的とした。調査方法は、Mood Scale (気分) の尺度を用いたものと半構成的面接である。その結果、看護学生の気分の変化は、患者・教員・学生間などの人間関係や学生自身の自己の性格特性に関する事が最も強い要因であることが判った。また、実習前と実習後のMood Scalesの値は、両者ともに高く、平均値において有意差はなかった。看護学生の気分に影響する要因は、間近に迫っている期末試験や今後予定されている実習などであることが明らかになった。

さらに、看護学生の学習意欲は、学生が精神的に危機的状況の時低下していることが判った。

キーワード：看護学生の気分・情動 学習意欲 臨床実習 動機づけ 人間関係

I はじめに

看護学生は、臨床実習の体験で生命の尊さ、楽しさ、素晴らしさ、人間の生き方など学びとれる多くの場面がある。しかし、一方では、実習での未知の体験に対する不安や悩み、緊張、あせりなど看護学生にとってダイナミックな気分・情動の揺れ動きがあると推察できる。そこで、看護学生は、臨床実習での気分の変化と学習意欲との関連があると考え、その状況を調査し、支援することにより今後の看護教育活動の一助となるのではないかこの研究に取り組んだ。

この研究方法の測定尺度は、國岡ら¹⁾の研究と面接法である。Mood Scaleは、尺度開発過程において、看護学生国家試験前後の気分の差を調査しているが、有意であった($P < 0.01$)との報告を参考にした。

II 研究目的

1. 看護学生の実習に関する気分の変化とその要因及び変化の過程を明らかにする。
2. 実習前後の気分の変化と学習意欲との関係を明らかにする。

III 研究方法

1. 調査対象：S看護専門学校3年課程の2年生34名
2. 調査方法：34名の学生にMood Scale²⁾による調査を臨床実習前(以後実習前という)と臨床実習後(以後実習後という)におこなった。併せて実習後には、実習の配置病棟ごとに2名を選出し、計10名に半構成的面接を実施した。アンケート用紙は、調査者が学校側に主旨説明を行い、了解のもとに学生に教室で一斉に配布し収集した。面接は、調査者が、学生に主旨説明を行い、了解を得た上で実施した。
3. 調査期間：平成8年10月18日から平成8年11月27日
4. 調査内容：

1) Mood Scale (以下MSと略す)：「MSは、3カテゴリー18項目からなり、人間の、ある時点での状況を測定する尺度であり、意気揚々～抑鬱、落ち着き～不安、調和～怒りの3カテゴリーごとに、気分の主軸である快、不快を6段階で質問するものである³⁾」。

2) 面接内容：①楽しく明るい気分になったときはどんなときでしたか②落ち込んでしまったときや悩んでしまったときはどんなときでしたか③気分に変化がみられたときややる気は変化しましたか④意欲のわからないときはどんなときでしたか⑤実習前後でどんな気持ちの変化が

1) 川崎市立看護短期大学

2) 神奈川県立平塚看護専門学校

おこっていますか⑥実習前後で学習への取り組みが変化していますかなどの①～⑥項目とその他である。

5. 分析方法

- 1) MS と学習意欲の各調査項目について単純集計を行った。
- 2) 面接によって得られたデータを KJ 法にて分類し、気分や学習意欲に関連したと考えられる要素を抽出した。
- 3) 統計学的分析は、汎用統計学パッケージ SPSS を用いた。

IV 用語の定義

学習意欲：学習に興味を持ち自分から進んで積極的に学習に取り組む意志・欲求・やる気。

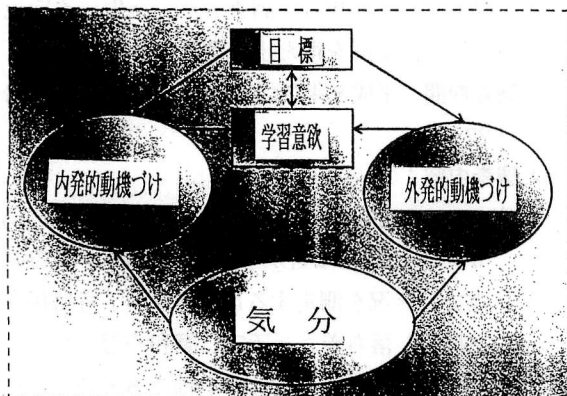
情動：外界からの事物、他人の言動を知覚することでおきる快、不快などの気持ちをいい、多様な心的状態の総称。

気分：恒常的ではないが、ある程度持続する感情の状態。

臨床実習：医療施設などにおいて、直接患者と関わり実施する実習

動機づけ：自己の内部・外部からの働きかけで、ある目的に向けて一定の方向・行動に向かわせるもの。

V 概念枠組み



(図1) 概念枠組み

人間の行動はなんらかの目的を果たそうとする欲求により動機付けられている。しかし、この欲求は必ずしも意識化されていなかったり、欲求の強さが変わることにより動機付けとなる刺激の内容も変化してくる。

動機付けには、自己の内部から自己を動かしていく内発的動機付けと外部からの働きかけで行動をおこす外発的動機付けに分類される。

学習においても、意欲を持って自己の目標にのぞむためには動機付けが必要であり、この動機付けにより学習意欲（やる気）が引き起こされる。これらは、目標達成に向けての行動となって行く。

目標は達成するための指標でもあり、動機付けの動因にもなるものである。

気分は、様々な要因で変化していくことが考えられ、人間の考え方や感じ方に大きく影響を及ぼす因子と考えられる。さらに気分は学習意欲にも影響を及ぼし行動に変化を与える一因と考える。

VI 結果

1. Mood Scale の結果

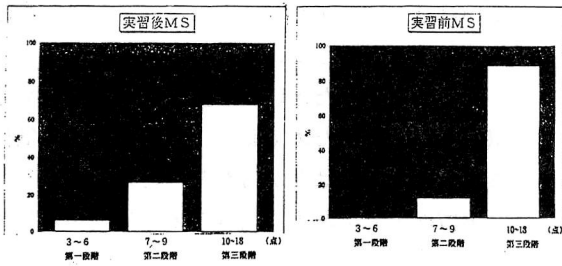
MSの得点平均は、実習前が11.97 (SD=2.50)、実習後では11.38 (SD=3.15)であった。MD (意気揚々～抑鬱) は、実習前が4.09 (SD=0.87)、実習後では3.79 (SD=1.27)。MA (落ち着き～不安) は、実習前は4.24 (SD=0.78)、実習後では3.85 (SD=1.44)。MH (調和～怒り) は、実習前は3.88 (SD=0.84)、実習後では3.74 (SD=0.83)であった。実習前後の得点差は、MS0.59、MD 0.29、MA 0.38、MH0.15であった。(表1参照)

MSの度数分布は、実習前では第一段階(軽度不安群)の得点3～6は0%、第二段階(中等度不安群)の得点7～9は11.76%、第三段階(高度不安群)の得点10～18は88.24%であり、実習後では第一段階の得点3～6は、5.88%、第二段階の得点7～9は26.47%、第三段階の得点10～18は67.65%であった。(図2参照)

MSの最大値は実習前が17で実習後が16であった。中央値は、実習前が12で実習後が11であった。最小値は、実習前が8で実習後が5であった。

(表1) MSの平均得点

	MS		MD		MA		MH	
	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD
実習前 (n=34)	11.97	2.5	4.09	0.87	4.24	0.78	3.88	0.84
実習後 (n=34)	11.38	3.15	3.79	1.27	3.85	1.44	3.74	0.83
実習前後の差	0.59		0.29		0.38		0.15	

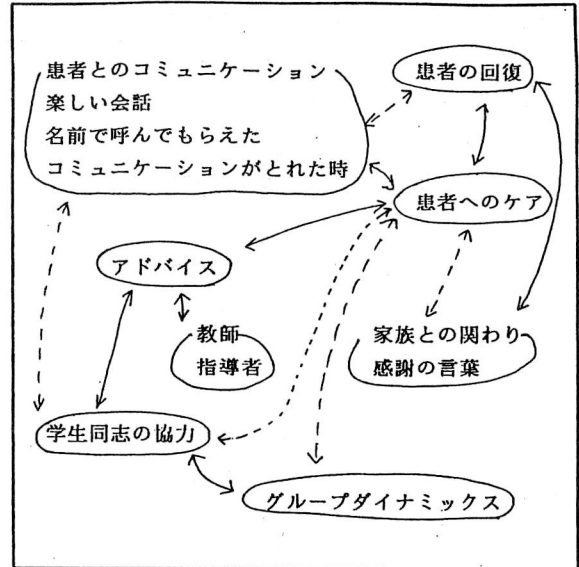


(図2) MSの度数分布

2. 面接結果

1) 実習中楽しく明るい気分になったとき

1) に関しては、患者との関わりに関する項目についての回答が一番多く聞かれた。その内容は、患者とスムーズに話しをすることができた、患者と楽しい会話をする事ができた学生さんではなく名前でもらえたなどコミュニケーションがうまく行えたこと。背中に温湿布を行ったとき「ありがとう暖かいよ」と言ってもらえた、全然喋らなかった人が全身清拭の時に「エー気持ちや」と喋ってくれたことなど、看護ケアを行って患者に喜んでもらったこと。看護ケアを行いながら、少しずつ患者が回復していく姿を見ることができたこと、患者が元気になり退院する事ができたこととこたえていた。また、患者の家族から感謝の気持ちを言われたことがとてもうれしかったという学生もいた。患者との関わり以外では、教師・指導者との関係で、戸惑っていたときにアドバイスを受け、考えが整理でき、実習を進めていくことができた、指導者が優しく威圧感を与えない人だったので緊張せずに実習ができた。グループメンバーに関してでは、グループメンバーに援助してもらい、パンフレットが作成できた、グループメンバー間の協力が良く、何でも話し合うことができたなどの回答があった。(図3参照)



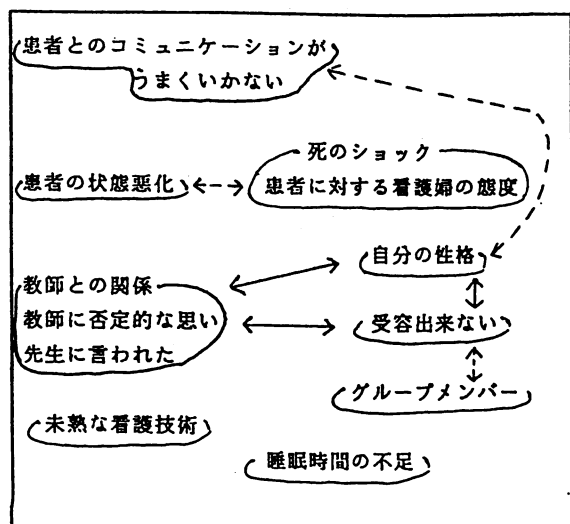
実習中楽しく明るい気分になったとき (図3)

2) 落ち込んでしまったり悩んでしまったときはどんなときでしたか

2) に関しては、1)と同様に、患者との関わりに関する項目が多く聞かれた。その中でもコミュニケーションについてのことが一番多く聞かれていた。その内容は、患者が学生に対して心を開いてくれずどう接したらよいのか悩んでしまった、患者への対応が悪かったために、患者から中学卒業程度の能力と思われてしまった、受け持ち患者が途中で変更になり、コミュニケーションがとれ始めたときに実習が終わってしまった、自分の受持患者なのに、自分には笑顔を見せず、他の学生ばかりに笑顔を見せていた、患者から「検温などの義務的なことしかしてくれない、君はそのような仕事しかできないのか」と言われたなどの回答があった。コミュニケーションに関する以外では、患者の安楽を考えたケアを行っても患者の疼痛が軽減しなかったとき“どうしてなんだろう”と悔しかった、患者の状態が急変し回復が遅れてしまったとき、患者が亡くなったときなどの回答があった。教師との関係では、教師が話すことを指導として受け止めることができず、先生に「言われた」「注意された」という思いを強く持っている学生が多かった。一部の学生は、教師との関係はうまくいってなかった、教師に対して否定的な感情しか持てなかったと述べていた。また学生は、患者や教師などの他者との関係だけで

なく、自分の性格について指摘を受けたとき、自分で自分の短所に気づいたときなど、自己の振り返りをしたときに、気分が落ち込んでしまったとこたえていた。

受容できないというカテゴリーは、実習中、教師や指導者からアドバイスを受けたことについて振り返ってみると、自分のために言ってくれているということはわかっていたが、素直に受け止められない自分がいた、言われても良いことは残らず悪いことばかりが残っている、実習中はせっぱ詰まっている状態だから考えられない部分があったなどの学生の思いをまとめたものである。人間関係以外のことでは、睡眠時間が短く体力的につらかった、診療の介助でミスをしてしまったことで自分の看護技術のが未熟さがわかったときなどの回答がみられた。(図4参照)



実習中落ち込んでしまったり悩んでしまったとき (図4)

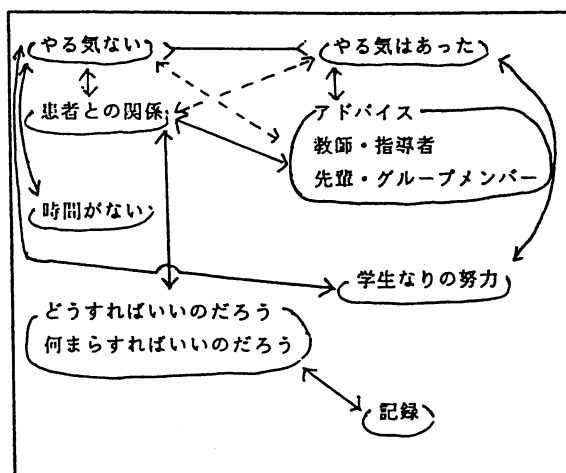
3) 気分に変化がみられたときやる気は変化しましたか

やる気については、あったとこたえた学生とないとこたえた学生の2グループに分かれた。やる気がないとこたえた学生は、患者の状態の悪化や患者とのコミュニケーションがうまく行えないことが原因となり、その変化とともにやる気もなくなってきてしまったとこたえている。そして、そのときの状況が危機的になると、学生の気持ちの中には、何をどのようにして行っ

ていけばよいのかわからなくなってしまったという気持ちがおきていた。

やる気があったという学生は、いつでもやる気はあったとこたえており、実習中もその気持ちに大きな変化はなかったとこたえていた。

実習の中で学習する内容が多く時間が足りない、毎日毎日調べることが多く時間が足りないという時間に関する事、記録物がたくさんあり何から書いていいのかわからない、記録には苦手意識があるなどの記録物が学生のやる気に影響を及ぼしているとの回答があった。学生は実習中問題や悩みがあると、教師や指導者・グループメンバー・先輩などの多くの人と関わりを持ち、その中で助言を受けて解決の糸口を見つけていた。やる気がある、ないのどちらの学生も実習に対しては、自分たちなりの努力をして頑張ったとこたえていた。(図4参照)

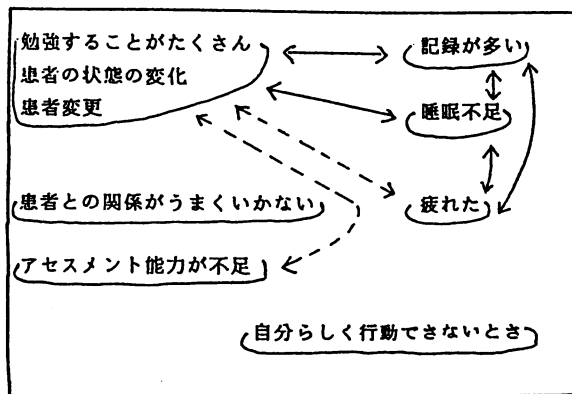


気分に変化がみられたときやる気は変化したか (図5)

4) 意欲のわかないときはどんなときでしたか

最も多く聞かれた回答としては、勉強する内容が多いということであった。その内容としては、学習すること調べるが多く大変だった、調べても次から次へとわからないことが出てきて嫌になった、調べようと思っても資料が無かった。わからないことを調べていると睡眠時間が無くなってしまったなど、厳しい学習状況だったことを述べている学生が大半であった。

また、記録についてもどうしてこんなに沢山の記録を書かなくてはいけないのだろうかと言う意見も聞かれていた。



意欲のわかないときはどんなときだったか (図6)

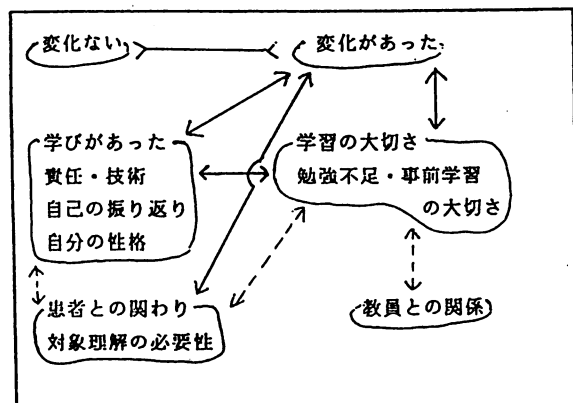
他者との関係では、前の質問項目同様に、患者との関係について述べる学生が多く、その内容は、患者の状態が悪化してしまったとき、患者とコミュニケーションがうまくとれず良い関係が築くことができなかったという回答であった。学生自身のことで、看護過程を展開していく中で自分のアセスメント能力の不足を感じた時、毎日睡眠時間が1～2時間と少なく、体力的に疲れた時、周囲の意見に圧倒され自分の考えを意見として出せず自分らしく行動できなかったなどの回答があった。(図6参照)

5) 実習前後でどんな気持ちの変化がおこりますか

変化ない、あまり考えたことがないという学生もいたが、実習が終了して気持ちが楽になったという学生もいた。変化があったという学生の大半は、多くの学びがあったと述べていた。その内容としては、看護婦の仕事に対する責任の重さ、看護技術を習得する事の大切さ、自己を振り返ることで今後の課題が見えてきたことなどがあった。学習の大切さを感じたという回答も多くその内容は、事前学習の大切さを知った、看護には知識が必要、自分の勉強不足を痛感をしたなどであった。患者との関わりに関しては、患者の気持ちになって考えることの大切さを知った、もっと患者に援助をしていきたいと思った、患者一人ひとりの個別性を把握しそのことを大切に援助していくことの大切さを知ったという回答が得られた。

教師との関係は、教師にアドバイスを受け良かった電話回線の番号教師とも良い関係が築け

るとの回答と、教師と良い関係を築こうとも思わないという両極端な回答が得られた。(図7参照))

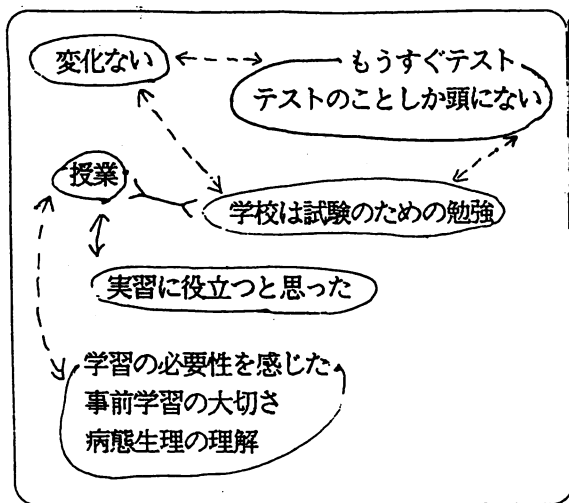


実習前後でどんな気持ちの変化がおこっているか (図7)

6) 実習前後で学習への取り組みが変化していますか

実習を体験して学習の必要性を感じている学生が大半であったが、中には実習前も後も変化ないとこたえた学生もいた。学習の必要性を感じているとの回答には、事前学習がとても大切であることがわかった、授業での学習が役立つことがわかった、気持ちだけ頑張ろうと思っても知識がないとだめなんだと思った、継続した学習が必要だ、技術演習を行う必要あると思ったなどがあった。今回の実習に関する学習に関しては、記録物の整理や記録についての学習を行うと言っている学生もいたが、大半の学生が、期末試験が控えているので試験勉強を優先させたい、試験勉強のことで頭が一杯、実習の振り返りをしたいが試験勉強の方が先と答えていた。

講義による授業(以下授業という)の学習については、授業の学習と実習での学びが関連していると答えていた学生もいたが、授業は試験のための勉強、授業で習っても実習のときには忘れてしまい、改めて勉強したと言う回答であった。(図8参照)



実習前後で学習への取り組みが変化しているか (図8)

VII 考察

1. 学生の気分の変化とその要因

学生の気分の変化とその要因は、実習前では第一段階の軽度不安群は認めず、第二段階の中等度不安群と第三段階の高度不安群で占めている。このことは、学生の中になかなか強い不安や緊張が起こっている状況と考えられる。実習後は、軽度不安群が約6%を示し、高度不安群が約21%減少している。しかし、中等度不安群と高度不安群の合計の比率は実習前と大きな変化はみられない。このことは実習が終了した段階でも学生はまだ、不安や緊張が継続している状態であると考えられる。

國岡らの国家試験前後の調査⁴⁾では、試験前後の平均得点差が3.18であり有意な差が(有意水準1%)認められている。しかし、実習前後では有意な差は認められなかった。これらのことから考えると、国家試験は継続的されず一時的なものであり実施時期も卒業間近に行われるもので、卒業後の希望や期待が見えているもの考えられる。臨床実習は断続的ではあるが、今後も継続されて行われるものであり、今後も実施することが計画されているためMSに影響を与えていると考えられる。また、面接の結果より、ほとんどの学生が期末試験を控えていことを気にかけており、試験勉強を行うことで頭が一杯とこたえていることから、臨床実習だけでなく、期末試験もMSの結果に影響を与える要因と考えられる。

実習中における気分の変化に及ぼす要因は、患者・教師・指導者、学生間での人間関係が最も多

くみられていた。そして、その中で一番強く影響している要因は、患者とのコミュニケーションであった。「学生たちは誰よりも患者の目に映じた自分の姿を意識しており、そして患者が示す言動に敏感に反応し、その意味をきわめて正確に把握する⁵⁾」のである。教師や指導者は、学生が患者と円滑な人間関係を築くことができるように、学習環境を整えて行くことが大切であると考えられる。教師との関係について考えてみると、実習中気分が落ち込んだ学生は、指導を受けても素直に受け取れず、注意を受けているように感じていた。これは、MSにも現れているようになかなか高い心理的緊張状態にあることが影響していると考えられる。

現代の若者は円滑な人間関係を築いていくコミュニケーション能力が弱いといわれているが、学生は病棟という新しい環境の中で、短時間の間に患者や指導者などと新しい人間関係を築いていかなければならない。このことが学生の精神的エネルギーを消費し、ストレスを与えており、学生の心理的緊張状態を引き起こす要因のひとつと考えられる。また、面接結果から、自分の性格や自分が短所と感じていることについて言われたことが辛い、悔しい、という結果が得られている。このことから、学生は自己の振り返りを行うような事柄に対しては、教師の言葉を素直に受け止めることができず、感情的に受け止めている傾向があると考えられる。教師は、学生が素直に指導を受け入れられるように、そのときの学生の状況に応じた対策を考えていく必要があると考えられる。

教師は、臨床実習の期間中だけでなく、臨床実習終了後も学生の気持ちがどのように変化しているのか把握し、他の教員とも連携し学生の指導にあたる必要があると考えられる。

また、学生の気分の変化は、患者の状態変化によってもおこることがわかった。そしてその中でも、初めて人間の死というものを体験した学生は、少なからず大きなショックを受けており、教員はこのショックに対する精神的フォローができるように関わる必要があることが示唆された。

2. 学習意欲の変化とその要因

学習意欲の変化とその要因について、面接の結果をもとに述べる。

患者と円滑な人間関係を結ぶことができなかつたときに意欲がわかかなかったという回答がみられた

ことは、学習意欲においても患者との人間関係が大きな影響を与えていると考えられる。中川らは「受け持ち患者の選択と決定は、学生の学習意欲を左右する重要な因子となる⁶⁾」と述べているように、受け持ち患者の選択と決定は学生の能力やパーソナリティーをふまえて検討することも必要であると考えられる。患者への看護ケアの実践では、患者から「ありがとう」と言ってもらえた。喋れない人が喋るようになった、体動がスムーズになってきたという体験を通じた看護の喜びが聞かれており、体験を通して看護の楽しさを学ぶことが学習意欲を高め、臨床実習における学習の効果を高められていると考えられる。

臨床実習期間中の日々の学習に関しては、毎日調べることが多く時間が足りない、記録物が沢山あり何から書いていいのかわからないという、学習状況そのものが学習意欲の低下に影響していることがわかった。学生は、患者の状態の変化に応じて、病態生理や検査など様々な項目について調べる必要性を感じているが、調べることはばかりに集中してしまうと、看護の必要性を考える時間や実習記録を書く時間がなくなってしまうことも考えられる。また、学生は患者を把握し、患者へケアを提供するために、情報を記録として整理し学習を進めている。記録用紙が数種類に及ぶと、その内容が学習意欲を低下させる一因となってしまうと考えられる。このことは、実習全体の学びにも影響してくるので、教師は、学生が患者ケアに必要とする情報や知識がどの位あればよしとするのか、学生と共に日々考え指導を行っていく必要があると考えられる。

睡眠不足と、身体的に疲れてやる気がなくなってしまうとの面接結果が得られている。これは、学習時間や記録の量とも関連しての睡眠時間の短縮が考えられることと、実習施設までの通学距離が長いことから、通学時間が長くなり、身体的に疲労をきたすのではないかと考えられる。

周囲に圧倒されてしまう、自分らしさが出せない、やらされている感じがするという気持ちを持っている学生が意欲の低下を示している。嘉屋は「看護学生が期待する看護教師の関わりは“必要時”であり“方向性の指示的関わり”であった⁷⁾」と述べているように、学生が主体的に学習に取り組むことのできる環境を整備することが必要であ

ると考える。

VIII まとめ

本研究の結果以下のことが明らかになった。

1. MS 値は、実習後も 10 点以上の高値を示していた。実習前後の値に差はあまりなかった。
2. 気分は実習だけではなく、間近に迫っている期末試験や今後の実習などによっても、不安状態となるのでサポートが必要。
3. 気分の変化は患者、教師、学生間での人間関係や学生の自己の傾向に関することが要因になって起こっていた。
4. 学生の危機的状況を生み出す要因は、患者からの拒否、状態の悪化などであることがわかり。さらに、学生の意欲を低下させる要因となっていた。

IX 研究の限界と今後の課題

1. 調査対象が、3 年課程の看護専門学校一施設で、対象者が 34 名と少ないことから一般化して考えることは難しい。
2. MS は、一定の限られた時間の中の気分の変化を測定するものであり、継続的な変化を測定した調査ではない。
3. 今後、看護教育制度に基づく学校差や実習の状況差があるか否か、量的、質的、継続的検討が必要である。

X おわりに

学生は臨床実習というリアリティにあふれた学習の場において、人間関係の難しさや看護の喜びを体験している。しかしそれと同時に、悩みや不安などを抱えることで気分が危機的になることがあり、学習意欲に影響を及ぼしていることが明らかになった。そして気分の変化は臨床実習だけでなく、間近に迫っている試験や今後の臨床実習によってもおこるので、継続的な学生へのサポートの必要性を示唆す

引用文献

- 1) 國岡照子, 小林八代枝, 勝本清美他. Mood Scales の開発—MS の信頼性と妥当性の検証—
HealthSciences. Vol.6, No.4, pp.44-55 1990
- 2) 國岡照子, 小林八代枝, 勝本清美他, 前掲書 1) p.49.
- 3) 國岡照子, 小林八代枝, 勝本清美他, 前掲書 1) p.44.
- 4) 國岡照子, 小林八代枝, 勝本清美他, 前掲書 1) pp.44-55.
- 5) 中西睦子, 臨床教育論—体験から言葉へ—, ゆみる出版, 1996. p66.
- 6) 中川順子, 学生の学習意欲を左右するもの, 岡山臨床看護研究会 臨床看護研究 Vol.1, No.1, pp.10-15 1994.
- 7) 嘉屋優子, 看護学生の主体性と看護教師のかかわりへの一考察<学生の意識を知るための調査>看護教育
Vol.35, No.6, p.434-438 1994
- 8) 鈴木康平他, 現代青年心理学, 有甲閣ブックス p.66 1993.
- 9) 福島 章. 青年期の心—精神医学からみた若者. 講談社, 1994.

参考文献

- 10) 嘉屋優子. 看護学生の主体性と看護教師のかかわりへの一考察<学生の意識を知るための調査> 看護教育
Vol.35, No.6, p.434-438 1994.
- 11) 鈴木 潔, 人間理解の科学—心理学への招待—, ナカニシヤ出版, 1995.
- 12) 三浦麗子他. 臨床実習の対人関係が学生に及ぼす心理的影響とその対処行動 (第3報). 第22回日本看護学会集録 (看護教育) pp.45-48 1991.
- 13) 汐見稔幸, “やる気” 育ての陥穽と可能性—やる気への教育学視点をめぐって—.
医学と教育. Vol.42, No.4, pp.322-328 1994.
- 14) 村田恵子, 看護学生の学習意欲の深まりと看護観の変容, 看護展望. Vol.5, No.4, p.18-23 1980.
- 15) 森田チエコ. 看護学生の学習意欲の変化とそれに関連する要因の研究. 第10回日本看護学会集録 (看護教育)
pp.91-93 1979
- 16) 篠原千恵子, 学生が積極的に取り組むための教師の関わりを考える—実習要因の阻害因子の探求から—
教務と臨床指導者, Vol.15, No.2, p.11-p28 1992
- 17) 佐々木俊介. 学習意欲. 看護教育. Vol.14, No.2, pp.125-129 1973.
- 18) 松崎和代他. 看護学生の精神健康度と学習意欲の関係. 第25回日本看護学会集録 (看護教育) pp.17-19 1994

The Effects of Nursing Student's Mood Changes on Their Willingness to Learn

Teruko KUNIOKA¹⁾ Junko TANGE²⁾

Abstract

This study was done in order to make clear the effects of nursing student's changing moods on their willingness to learn and the relevant factors. The survey method used was Mood Scale and non-directive interview

As a result we found that their mood changes would most frequently stem from their human relations with patients, teachers or other students and their own personality traits

Pre-and post-practicum Mood Scale values were both high, and of similar statistical significance. The factors directly contributing to mood changes were found to be such ones as imminent term-end examinations or practicum scheduled soon to be given

In addition, the student's willingness to learn seemed to tend to weaken when faced with mentally critical situations.

Keyword:

nursing student's mood/emtion, willingness to learn, practicum, motivation, human relations